

支所だより

各総合支所管内での身近な出来事や話題などを毎月お知らせするコーナーです。今月は東予総合支所から「壬生川の地名の由来や起源」について紹介します。

東予総合支所

〒799-1394 周布 349 番地 1

TEL0898-64-2700

FAX0898-65-4363



▲役場としての役目を終えた後、壬生川公民館として使用された旧壬生川町庁舎（昭和3年築）

市民の皆さんや愛媛県内の方々にはなじみの深い「壬生川」という地名は、JRの難読駅名として知られていることから分かるように、県外からこの地を訪れる人に「にゅうがわ」と読んでもらうことは難しいようです。パソコン等へ入力する際に「丹生川」としか漢字変換されず、「壬生川」から「にゅうがわ」へと漢字と読みがながりにくいことも、難読の要因の一つだと思われます。

そこ今回、東予地区の中心に位置する「壬生川」の地名の由来や起源について、その歴史を振り返ってみます。

この地域は、道前平野の東部を母体とする農業集落と、深い入り江と遠浅の海岸を漁場とする漁業集落からなる寒村で、大小数本の河川が海へと注ぐ水郷の里でしたが、住民は度々水害に見舞われる異川の村名を恐れて「入り川」と書いて「にゅうがわ」と呼称を改め、延喜の時代（901～923年）までその名称を使っていた。

ところが、その後もこの地域では水難が続いたため「入り川」の文字を嫌い、朱色を意味し火で水を乾かす意味もある「丹」の字を使った「丹生川」と改めました。

なお、この伝承には別の見方もあり、その昔に古子川上流では水銀が採取されており、水銀を焼くと赤くなることから「丹生川」と呼ぶようになったとの説も存在します。

その後、文和元（1352）年に丹生川浦の海岸を埋め立てた時に、伊勢神宮を勧請し奉祀しましたが、「丹生川」の文字は天照大御神の御妹罔象女神を祀る「丹生川上の神社」の社号と一致しており、恐れ多いとの指摘により、この年が「壬辰」に当たることから「丹」の文字を「壬」に置き換え「壬生川」とし、「にゅうがわ」と読ませることになりました。この時の呼び名が600年以上続いて現在に至っています。



▲旧壬生川町役場跡にある現在の壬生川公民館

ちゃんと読めますか？ 「壬生川」を「にゅうがわ」と…

■地名の由来・起源について

■近代の「壬生川」

壬生川の地は、古くには桑村郡の巽川の郷として、現在の大明神川が開通する以前は満潮時などに、常に古子川が氾濫していました。

明治4年、廃藩置県の発令によって松山藩が松山県となり、区政が実施されて壬生川地域は第10大区第15小区と呼ばれていました。明治11年、郡区町村編成法が布告され、明治13年に壬生川村・大新田村が連合して戸長役場を興照寺に置き、学校や公会堂などの公共施設の設置を進めました。明治22年には明理川村・円海寺村・喜多台村・大新田村と合併し壬生川村となり、明治34年に町へ移行して、次第に商業都市としての形態を整えていったのです。

なお、その後の推移としては、昭和46年の壬生川町と三芳町の合併によって東予町が発足し、翌47年には東予市政を施行しました。そして、平成16年11月に、西条市・東予市・丹原町・小松町が合併して今日に至っているのです。



▲かつて戸長役場が置かれていた興照寺

【参考文献】
○住みよい「ふるさと」づくりに先人に学ぶ・その九（東予市壬生川公民館主事 玉井十寸男著）
○壬生川郷土史（壬生川郷土史研究会）
○東予市誌（東予市誌編纂委員会）